

子どもを対象とした男女共同参画推進講座のあり方について

— 小学3年生への実践をもとにした考察 —

島田 香

はじめに

第3次男女共同参画基本計画（内閣府・2010）の第2部第3分野では、子どもの頃からの男女共同参画の理解の促進を掲げ、その具体的施策として、「初等中等教育において、児童生徒の発達段階に応じ、学習指導要領等に基づき、社会科、家庭科、道徳、特別活動など学校教育全体を通じ、人権の尊重、男女の平等や男女が相互に協力し、家族の一員としての役割を果たし家族を築くことの重要性などについて指導の充実を図る。また、教科書においても教育基本法（平成18年法律第120号）や学習指導要領の趣旨を踏まえ、適切な記載がなされるよう配慮する。男女平等が歴史的にいかに進展してきたか、国際的にみて我が国の女性が置かれている現状はどのようになっているかなども含め、男女平等を推進する教育の内容が充実するよう、教職員を対象とした研修等の取組を促進する。」、「子どもの頃から男女共同参画の視点に立ち、生涯を見通した総合的なキャリア教育を推進する。その際、社会・経済・雇用などの基本的な仕組みや労働者としての権利・義務、男女共同参画の意義、仕事と生活の調和の重要性について理解の促進を図る。」、「子どもが暴力の被害者になることを防ぎ、また、子どもが将来暴力の加害者になることを防ぐため、暴力は人権侵害であり絶対に許されるものではない

ことについて、子どもの頃からの教育・啓発を推進する。」、「男女が相互の人格を尊重し、相手の立場を理解し助け合うような人間形成を図るため、子育て中の親やこれから親となる者等を対象とした家庭教育に関する学習機会を提供する。」の4点を、男女平等を推進する教育・学習として挙げている。

これを受け各自治体は、子どもを対象とした男女共同参画事業に取り組んでおり、筆者が講師を依頼されたA市も、この事業の一環として講座を開催している。この講座は子どもの頃からの男女共同参画への理解促進と、将来を見通した自己形成の推進を図ることを目的として、A市内の学校で講座を開催するというもので、2019年度はA市内の小学校で3年生を対象に開催されることが計画された。筆者はこの講座の内容を計画・立案し、講師を担当することになったのであるが、子どもを対象にして男女共同参画の理解を促すには子どもの認知、対人関係や社会性、道徳性の発達を考慮することが必要であるだろう。例えば小学校高学年であれば、男女共同参画の内容については授業や教科書から論理的に学ぶことができるだろうが、小学校低学年ではまだ難しい部分が多い。したがって小学校低学年では日常生活の体験からイメージできるような形で学べるように工夫する必要があると考えられる。

講座で扱う内容についての検討

男女共同参画の概念は、人権の尊重と男女の相互協力がベースにあることが分かる。この基本的な態度は、小学校低学年であっても、日常生活や学校生活における体験からイメージしやすいのではないだろうか。人権の尊重や男女の相互協力は、対人関係やコミュニケーションにおいて態度や行動として表現されるものであり、他者を思いやり助け合ったりすることである。つまり子どもたちの向社会的行動を高めることが人権の尊重や男女の相互協力に基づく態度や行動を高めることにつながると言えるのではないだろうか。子どもの向社会的行動については、Piaget (1930) や Kohlberg (1969) の道徳性の発達理論と深く関連があり、道徳性についてはその後も様々な理論が提唱されてきた。本論で採り上げたい研究は、道徳と社会的慣習は区別される概念であると提唱した Turiel (1983) の領域特殊理論である。この理論をもとに下條ら (2015) が行った児童の規範意識の発達に関する研究では、年齢が上がるにつれ道徳と慣習は区別できるようになるとはいえ、小学5～6年生においても道徳と慣習は概念的に同じ領域であることが示唆された。下條 (2015) らは Turiel (1983) の理論による社会的知識の分類を示しているが、道徳における知識の基盤は「正義や福祉や権利といった価値概念」であり具体的な行動事例としては「盗み、殺人、いじめ、詐欺 (嘘)、援助」となる。また慣習における知識の基盤は「社会システムに関する概念」であり具体的な行動事例は「挨拶、呼称、生活習慣、テーブルマナー、校則、服装」となる。小学3年生ではこのような道徳と慣習は区別なく受け入れられると言えるだろう。小学3年生向けの内容としては、日常生活や学校生活と馴染みのある慣習を道徳と同じように扱

うことができると考えられる。

講座で扱う技法についての検討

次に、そのような慣習を、人権の尊重や相互理解に基づくものとして身に着けさせる方法としては、アサーション・トレーニング (以下 AT と略す) が適切ではないだろうか。アサーションについて平木 (2009) は「アサーションは、相互尊重のフェアプレイの精神にもとづいた自己表現であり、いわば基本的人権を守るための考え方と方法である」と紹介している。

小学校においても授業や研究の一環として AT の実践例は多くある。尾上 (2008) は小学校の AT について、まず相手を傷つける言葉 (ちくちく言葉) を知り、次に相手を気持ちよくさせる言葉 (ふわふわ言葉) を知り、そして相手を尊重する言葉 (ふわふわ言葉) 使って自分の気持ちを表現することを提唱している。尾上が「ふわふわ言葉」として児童にとったアンケートでは、「ありがとう、ドンマイ、がんばれ、おはよう、ごめんね、すごい、おめでとう、大丈夫?、上手だね、一緒に遊ぼう」という言葉が挙げられている。また高橋ら (2013) は小学6年生を対象に、一回の授業の中で AT を行い、授業前後の質問紙の回答から「僅かではあるが、授業後の方がアサーティブな考え方に変容するという変化がみられた」と報告している。

小学4年生を対象にした実践では、全10セッションの AT を実施した渡部ら (2015) の研究があり、被験者全体でトレーニングの効果があったことを示している。それは統計的な分析だけではなく、トレーニング実施後に、相手の気持ちを考えながら自分の意見もしっかりと話す児童の様子が教師の行動観察によって確認されていることも報告されている。さらに堀之内ら (2016) も、児童の自己表現力を育む授業づ

くりに関する実践研究の中で、ATを活用することによって、児童の自他尊重の態度を意識付けていることを示している。この研究も小学4年生を対象にしたものである。このように小学校4年生以上の実践例は多く、ATの効果も認められている。下学年である小学3年生では、上学年である小学4年生以上のように、相手の立場を考えた行動をとることを求めるのは難しいかもしれないが、約束や決まりを守るという行動はできる年齢である。したがって小学3年生の場合でも扱う内容を分かりやすく工夫することによりATを効果的に利用できると思われる。

本論の目的と方法

筆者がA市から依頼された小学3年生を対象とした講座の実践を通じて、子どもを対象とした男女共同参画推進講座のあり方について検討する。先述した通り、講座で扱う内容は日常生活や学校生活と馴染みのある慣習とし、講座で扱う技法はATとし、『イラスト版子どものソーシャルスキル』（合同出版）を参考・引用して筆者が講座の計画と立案を行い、A市の担当職員、小学校の担当教員に了承を得て実施した。また実践内容とアンケート結果の研究への利用についても説明し了承を得た。

講座は2019年10月にA市立小学校3年生(2クラス合同・49名)を対象に、45分間の授業時間に体育館で行った。講座のタイトルは「よりよい関係をつくるコミュニケーションを学ぼう!」とし、児童には「あいての気持ちを考えて自分の言いたいことを言う方法」と題したワークシートを配付した。

進行は、まず導入として、人とうまく付き合うためには、相手の気持ちを考えて自分の言いたいことを伝えることが大事であるという、

ATの基本的な考えを講師(筆者)が説明した。その次に、児童に配付したワークシートを見てもらった。ワークシートにはまず、【ことわりのセリフ】として①あやまりの言葉「ごめんね」、②ことわる理由「今日は委員会があったから」、③ことわりの言葉「遊べないんだ」、④代わりの案「あしたならだいじょうぶだよ」というセリフが例として示してあり、講師がゆっくりと声を出して読んで内容を説明した。

次に【ことわりのセリフ練習】として、「A君は宿題をやってこなかったようです。A君が近づいてきて「ねえ、宿題を見せてよ」と、あなたにいいました。あなたは見せたくありません。ことわりたいと思っています。なんと伝えればいいのでしょうか?」と問題が示してあり、【ことわりのセリフ】の例にあるように、あやまりの言葉、ことわる理由、ことわりの言葉、代わりの案についてそれぞれセリフを記入できるように空欄がある。講師は問題を声に出して読み挙げ、自分ならどのように言うか考えて空欄に記入するように伝えた。児童が記入している間、担任教員に見回っていただき、人前で発表することに抵抗がないと思われる児童をペアで選んでおいてもらった。

記入がだいたい終わったタイミングで4組のペアに前へ出てきてもらった。まずペアのひとりがA君役になり、「宿題を見せてよ」と相手に伝え、相手は自分がワークシートに記入したセリフをA君役に伝える。断りのセリフを伝えられたA君役がどのように感じたか、講師からインタビューする。そして役割を交代して同じように進め、これを4組のペアに順番に発表してもらった。

まとめの言葉として、頑張って考えたり、発表してくれたことを労い、学んだことを活かしてほしいと講師から伝えた後、児童はA市から配付されたアンケート用紙に回答して終了と

なった。アンケートでは「授業は楽しかったですか。(4件法)」、「内容はわかりやすかったですか(4件法)」、「今日の授業の感想を教えてください(自由記述)」という質問があった。

アンケート結果

「授業は楽しかったですか?」の問い(表1)に対しては、「とても楽しかった」、「楽しかった」と回答した児童は38名(77.5%)おり、講座を受けたことは児童にとっては楽しい体験になったことが分かる。また「内容は分かりやすかったですか?」の問い(表2)に対しては、「とてもわかりやすかった」、「わかりやすかった」と回答した児童は41名(83.7%)おり、市講座の内容は小学3年生のレベルに合っていたことが分かる。表3は授業の感想についての自由記述を、中心となる記述内容をもとにして分類したものである。記述内容の意味が分かりにくい児童が1名、宿題についてのみ言及している児童が2名、楽しかったという内容だけの児童が1名いたが、「優しく言うことが分かった」「断りの言葉の言い方が分かった」「相手に言葉で伝えることがわかった」と記述している児童は26名、「学んだことを活かす」と記述している児童は10名おり、講座のワークを通じて伝え方を理解できた児童が多かったことが分かる。また「相手の気持ちを考える」、「相手にとっても自分にとっても良い」といった内容を記述している児童も5名おり、ワークの基本にある考え方を自分の言葉で記述できる児童がいることも分かった。

表1 「授業は楽しかったですか?」への回答数

選択肢	回答数(比率)
とても楽しかった	10(20.4%)
楽しかった	28(57.1%)
あまり楽しくなかった	4(8.2%)
楽しくなかった	3(6.1%)
回答無し・無効	4(8.2%)
計	49

表2 「内容はわかりやすかったですか?」への回答数

選択肢	回答数(比率)
とてもわかりやすかった	19(38.8%)
わかりやすかった	22(44.9%)
少しわかりにくかった	4(8.2%)
わかりにくかった	0(0.0%)
回答無し・無効	4(8.2%)
計	49

考察

(1) 小学3年生のコミュニケーション能力と講座の関連について

アンケート結果の感想からは、「宿題についての言及だけのもの」つまりワークで扱った内容だけを書く児童2名や、「楽しかったという内容だけのもの」、「記述内容の意味が分かりにくいもの」が各1名いたが、その他の児童はATを基にした伝え方を理解できたと考えられる。今回の研究対象は小学3年生であった。小学3年生が相互尊重による自己表現が可能であることを示唆する研究もある。たとえば山元(2011)は児童のコミュニケーション能力の発達の実態を、同一課題を用いた小グループの話し合い活動を対象にした縦断的研究によって明らかにしている。この研究によると、たとえば小学3年生ではお互いの意見を位置づけ整理する発話が現れ、小学2年生の足し算的な累積的会話が、協応をベースにしたより質の高い累積的会話に発展するという。また倉盛ら(1998)は、

表3 「今日の授業の感想を教えてください」への回答内容の分類
(回答者47名・記述内容の抜粋は原文の通り)

分類内容	人数	記述内容の抜粋
記述内容の意味が分かりにくいもの	1	「あやまり方とかこのままだとだめだと思う。」
宿題についての言及だけのもの	2	「人にしゅくだいをみせてってゆうたらだめってわかった。」
楽しかったという内容だけのもの	1	「言い方の話しや、大きなセリフも誰かがやって楽しかった。」
講座のやり方についての言及	2	「ほかの人がやっているのをみていてなるべくいみがわかったけど自分でやってよりよくわかったしよかったです。」
優しく言うことが分かった	10	「あんまりきつく言わずやさしく言うようにしようと思った。」
断りの言葉の言い方が分かった	12	「友だちとお話して、ことわる言葉をこう言ったらいいんだなと思いました。」
学んだことを活かす	10	「むりなときにこういえばいいんだなとわかった。次こんなふうに言われたらこれを思い出して言う。これからこれをゆって行く。」
相手に言葉で伝えることがわかった	4	「ことばは、いうものだけじゃなくて、人につたえるものだとしたことばにじしんをもちました。」
相手の気持ちを考える	3	「明日からは、みんなにやさしくしていきたい。友だちの気持ち分かった。全部、言葉で相手につたえたい。友だちにきずつけないようにする。友だちの気持ちを考える。」「あいての気持ちを、考えてというのがわかった。」「人にことわるときは、相手がどう思うか考えてから相手に応えたいと思った。」
相手にとっても自分にとっても良い	2	「相手のことを思ってやさしくいったら、相手も、自分も、気持ちが楽になるということをわたしはしました。これからも、ことわりのセリフを大切にしていきたいです。」「友だちにこうやってつたえればいいんだと思いました。友だちはこうやってわかってくれる人だと思いました。やさしくしてたのしくあそべる方ほうがわかった。友だちは、こう言ったらアキラメてくれる。」

小学校の児童が、道徳的判断課題について、自分と異なる意見を持っている児童と話し合う時、どのような発話を行い、どのようにして結論にいたるのかについて発達の検討を行っている。この中で1年生では、理由を述べる発話は少なく、理由の道徳発達レベルは低く、互いに理由を述べる前に結論が得られてしまうという特徴がみられたという。一方、3・5年生は、互いに理由を述べ、しかも高低両方のレベルの理由をあげ、互いに意見を出し合った後で、多くの新規な理由を出した側に結論を収束させていたという。このことから、3・5年生は相手を納得させるために相互交渉を行った後最終的な結論を決定し、1年生では3・5年生のように理由が相手を説得する役割を果たしていない

と分析している。

今回の講座では、相手の意に沿わない返答をする場合に、相手の気持ちを考え、意に沿えない理由があることを挙げ、代案を出すという、相手を納得させるための相互交渉ができる児童が多かったことがわかる。しかし一方で少数ではあるが、また自由記述の感想なので断定することはできないが、相互交渉に焦点を当てにくい小学1年生レベルの児童がいることも分かる。さらに一方で、「相手の気持ちを考える」「相手にとっても自分にとっても良い」という内容からは、ワークの基本にある考え方、つまり相互交渉の技法として利用したATの意味を理解し、自分の言葉で記述できる児童がいることも分かった。このように、アンケート結果の感想

の内容からは、大半の小学3年生には理解しやすい内容ではあるが、ATの基本的な考え方をさらに分かりやすく、ワークの前後で説明する工夫が必要であると考えられる。

また自由記述の感想で「優しく言う」と書いていた児童が10名いたが、ことわりのセリフの例で、あやまりの言葉として「ごめんね」と紹介した部分が影響を与えているかもしれない。先述した尾上(2008)は、小学校でATを行う際に、相手を尊重する言葉(ふわふわ言葉)を使うことを提唱しているが、この「ごめんね」はふわふわ言葉であり、相手を思いやる優しい言葉として、小学生には伝わりやすかったと考えられる。さらに「学んだことを活かす」と書いていた児童も10名いたが、先述の下條ら(2015)の研究では、道徳・慣習意識が高い児童は道徳・慣習行動も高いことが分かっている。「学んだことを活かす」とは書いていない児童も、学んだことを行動に移す可能性はあるだろう。

(2) 小学3年生を対象とした講座の意義について

山田ら(2013)は、「対人間での望ましい行動」「対人間で遵守すべき行動」「個人として遵守すべき行動」の3因子構造からなる小中学生用規範行動自己評定尺度を開発し、小学校3年生から中学3年生までの児童生徒を対象として規範行動の発達の变化を調査している。この結果、いずれの下位尺度においても学年が上がるにつれて得点が減少することが示された。山田らはこの結果について、男子の得点が下がり始める小学校中学年頃と女子の得点が下がり始める小学校高学年頃は、それぞれギャンググループやチャムグループといった新たな仲間関係の位相が出現する時期と一致すると分析している。このような仲間集団への所属に伴い、子どもたち

は新たな集団規範の遵守が求められる。つまり排他性の高い関係の中では、グループ内での集団規範が優先されるため、時として、校則や一般社会における社会的規範を逸脱することがあると考察している。つまり道徳や慣習の教育は子どもの向社会的行動を高めることになると考えられるのだが、特に小学校中学年・高学年以降のグループ内での集団規範が優先される前にあたる、小学3年生頃の道徳や慣習の教育は特に重要ではないだろうか。

先述した山元(2011)は「コミュニケーション能力の発達は、因子として認知思考能力の発達があり、人とのやりとりの中で、他者との関係の取り方や自己表現の仕方を学習することによってもたらされる」とし「認知思考能力の発達を促すためには、知識・経験の増加、経験を一般化して意味づける思考の訓練、経験を意味づけ、関係づけるのに必要な概念語の習得、論理的に考える学習活動の積み重ねが必要である」と述べている。本論では単発の講座ではあったが、小学3年生の認知思考力に合わせ、学校生活の日常場面からイメージできるワークを取り入れながら、対人関係における自己表現の方法を提案した。このような体験学習を継続的に行うことが有益であろう。

今後の課題

本間ら(2012)は文献レビューから、幼児期および児童期における向社会的な能力の発達は成人期の適応にも重要な研究領域であることを示している。本稿では、子どもの頃からの男女共同参画の理解の促進では、まず人権の尊重と相互協力を体験的に理解していくことが必要であると考え、この内容に基づいた講座を提案した。その結果、このような講座は発達年齢に合わせた内容であれば、小学3年生でも理解でき

ることが示唆された。今後

はこのような講座を受講することにより、子どもたちの考え方や行動がどのように変化し、子どもたちの体験的理解が、将来の男女共同参画推進にどのように影響を与えるのか検討していくことを課題にしたい。

引用文献

- 平木典子 (2009). 改訂版アサーション・トレーニング—さわやかな <自己表現> のために— 金子書房
- 本間 (樋掛) 優子・内山伊知郎 (2012). 幼児・児童の感情発達における社会的表示規則と向社会的行動—その概念と研究のレビュー、および展望— 新潟青陵学会誌, 5 (1), 37-45.
- 堀之内利成・立岡昌文・呉屋博 (2016). 児童の自己表現力を育む授業づくりに関する実践研究—自他尊重の態度を大切にしたい活動に焦点を当てて— 長崎大学教育実践総合センター紀要, 15, 311-320.
- Kohlberg, L. (1969). Stage and sequence : The cognitive-developmental approach to socialization. 永野重史 (監訳) (1987). 道徳性の形成—認知発達のアプローチ— 新曜社
- 倉盛美穂子・高橋登 (1998). 異なった意見をもつ児童間で行われる話し合い過程の発達の検討 発達心理学研究, 9 (3), 191-200
- 内閣府 (2010). 第3次男女共同参画基本計画
- 尾上友宏 (2008). 人を傷つけるような言動の多い子—自己表現がうまくできない子へのかかわり— 児童心理, 62 (7), 680-684.
- Piaget, J. (1930). Le jugement moral chez l'enfant. 大判茂 (訳) (1957). 児童道徳判断の発達 同文書院
- 下條太貴・廣瀬等 (2015). 児童の規範意識の発達に関する研究：学校・家庭・地域での活動が規範意識に及ぼす影響 琉球大学教育学部紀要, 86, 151-169.
- 高橋真理・川崎尚子・斉藤ふくみ (2013). アサーション・トレーニングによる児童の自己主張行動の変化について 茨城大学教育実践研究, 32, 139-149.
- Turiel, E. (1983). The development of social knowledge :

Morality and convention. Cambridge University Press.

- 渡部玲二郎・江幡綾子 (2015). 児童のコミュニケーション能力を高めるための実践研究 (1) : 小学校におけるアサーション・トレーニングの試み 茨城大学教育学部紀要・教育科学, 64, 353-370.
- 山田洋平・小泉令三・中山和彦・宮原紀子 (2013). 小中学生用規範行動自己評価尺度の開発と規範行動の発達の变化 教育心理学研究, 61, 387-397.
- 山元悦子 (2011). 小学校のコミュニケーション能力の発達に関する縦断的研究—同一課題を用いた話し合いの学年間の差異に着目して— 福岡教育大学紀要, 60 (1), 49-72.

Abstract

A Workshop on Promoting Gender Equality for Children – Based on a Practice Among Third-Grade Elementary School Students –

Kaori SHIMADA

The study examined an ideal gender equality promotion program for children by conducting a workshop for third graders in an elementary school as requested by A city. The author organized a class based on a concept that, in order to facilitate the understanding of gender equality in childhood, the first thing children need to do is understanding and respecting human rights and having an experience of mutual cooperation. The results suggested that the gender equality program can be applied even with the third graders if its contents are appropriate for developmental ages of children.

Key words : gender equality promotion, workshop for children, assertion training